

子どもの口腔ケア

特集にあたって

医療連携による子どもの口腔機能の発達をサポートする口腔ケアを

2014(平成26)年の診療報酬改定につき、2016(平成28)年の診療報酬改定でも、周術期口腔機能管理の一部が改訂されました。臨床では医科と歯科の診療機関の連携を重要視した改訂のため、医科歯科診療連携、地域医療連携、口腔ケアチーム医療が推進されています。こうした動きは、口腔を単に独立した1つの臓器ととらえずに、口腔と全身の相互作用を大切にした医療が広く認められてきたことを意味します。

私たち子どもの医療に携わる者も、療養中の子どもの口腔管理を新たな視点で再構築する時期になったと考えて、本特集を構成しました。筆者自身の反省点は、これまでの小児看護教育のなかで、主に乳歯萌出以降の子どもの口腔ケアと、子どもの歯磨き習慣の獲得と支援を中心に教授内容を考えてきたことです。それは、いわゆる狭義の口腔ケアの内容で、口腔衛生管理(歯ブラシでの歯磨き、うがいなど)を中心とした講義と演習を考えてきました。経管栄養や人工呼吸管理下の新生児の口腔機能の発達へのアセスメントとケア介入、

乳歯の多歯に齲蝕が進んだ子どもと養育者への看護介入方法などに関しては、かなり手薄だったと思います。

現代の医療で求められているのは、広義の口腔ケアで、口腔の機能、摂食嚥下機能、発音、唾液分泌機能の維持と改善、口腔疾患の改善と予防、全身の健康状態の維持・増進に寄与する教育内容です。看護師国家試験の指定規則に沿ったカリキュラムのなかでは時間的制約があり、すべてを教授する余裕はありません。しかし、広義の口腔ケアについての目的や自己学習の視点を伝えていくことは可能です。

本特集を契機に、新生児期から口腔機能の発達を見据えた臨床・在宅での看護ケアが、歯科医師や歯科衛生士との協働によって、さらに進展することを願っています。

福岡看護大学健康支援看護部門
小児看護学分野教授
飯野英親 lino Hidechika